

はじめて、文章の中心となる文や語句が明らかになるこの焦点を何によって決めたらよいか、つまり、これから読もうとする問題点または問いをどうして読み手自身で設定したらよいかということである。

もっとも便宜的なものとして、題名、見出し、小見出しをあげることができる。ふつうの文章では、各段落の書き出しの文やことばに期待したい。とくに説明的な文章においては、述べようとする方向を、はじめに打出すのが一般的であるからである。そして、書き出しの文を問題として頭に置くのである。

○ 焦点化

文章の書き出しを読み手の焦点とすれば、文章を文の羅列とする見方は改められる。つまり、焦点(問い)に各センテンスを照らせば、おのずから「答」にあたる重要な文や語句が浮かんでくる。学習は元来主体的なものである、自分で問いを発見し、自分で解決の方途を見出す能力を高めて、はじめて主体的な意味での学力ということになる。

○ ことばの機能を考える

読みとるうえでだいじなことは「ことばに関する事項」である。読みの焦点、焦点化にも、あるいは要旨をとらえるにも、文型や文の成分の関係がいつもつきまとう。また、意味のかかり方を考えるにも、(てん)や助詞を重視しなければならない、このほか、文と文の関係、正しくとえるため、断定、推量、意志などに注意することなど、あげるといろいろな問題が重なっている。文法に即した読みができることは、論理的な思考力が高まってくることでもある。

イ 発問・板書・ノート

○ 発問は思考を刺激する

読解が自問自答を重んじた主体的な行為であるなら発問もそれに即して、子どもの思考を刺激するという限界を出てはならない、どのような発問によって子ども自身に焦点を発見させ、それを解決するてだてを考えさせるか。

発問における禁句を「文章の内容をとり出すこと」にして、もっぱら文章表現の上から発問することを研究課題とした。

たとえば「何がどうだ、という形に気をつけて、書き出しの文を考えよう」とか、「書き出しの考えに会わせて、だいじな語をとり出そう」などの発問によって問題意識をもたせ、焦点化をはかるてだてを講じさせる。

発問が、表現に密着したものであれば子どもの反応もまた、表現を通して内容をとらえるようになる、そして子どもの話し合いは、もっぱら表現のしかたをめぐるはずむようになる。これが内容の吟味になると、理科や社会に発展せざるをえなくなる。

○ 板書はことばの働きを機軸として

子どもの反応が表現をめぐる活動の所産であるなら板書もまた、表現に即したものが考えられるべきであ

る、つまり、発問と同様に、ことばの働きを機軸として板書を展開することである。そして、板書によって、直ちに内容が復元でき、文章の組立や要点がわかるように考えなければならない。

たとえば、学習のねらいや手順に従って、子どもの発言をとりあげてまとめていけば、おのずから何を読みの焦点とし何を要点としたかが板書だけでわかるようになる。

○ ノートは理解のすじ道がわかる

ノートには、いつ、なにを、どのように学習したかがわかるようになっているのがよい。板書をそのまま写したり、漢字の練習があったりするのが多いが、そこには、学習の主体である子どもの思考が認められるとはいえない。

読解では、読んだあとに考えるというより、読む過程で考えるのがしぜんである。したがって、読む過程でノートすれば、子どもの理解の過程がはっきりする。たとえば、学習で「読んでごらん」という指示より「要点をノートにとりながら読みなさい。」と指示する方が、より実際的であろう。

こうして、ノートにとどめたものを根拠として話合わせると、各人の考え方が紹介されるし、発表者も発表しやすい。ノートは、それぞれの個性があらわれ、理解のすじ道がわかるようなものが、もっともよい。どの子どもも画一的に同じことを書いているような学習指導は、子どもの思考を伸ばす、よい指導であるとはいえない。

ウ 授業研究

この学習指導法が、具体的に文章や子どもに即した場合、どんな姿であられるかを提示すると共に、子どもの理解の様相が、反応の上でどう表れているかを検討しようとする目的で、11月ごろ、約5時間にわたって授業記録をとった。

授業研究は、およそ二つのねらいを持ち、一つは教授過程の分析であり、二つには、学習過程の分析である。しかし、この場合、教授過程は分析というより、具体化を目標としたので、授業の段階とその指導に解説を付し、主として学習過程をとりあげた。

教授の段階と子どもの反応分析のおもな観点は次のとおりである。なお本年度は授業分析の方法的な研究に中心をおいた。

- 文章の内容的な洞察をどう考え、学習の計画をどう立てたか
- だんらくのとらえ方、要点のとらえ方
- 段落相互の関係をどのようにとらえたか
- ことばの使い方、文にどのような配慮を持って読んでいるか

以上の観点で授業の記録を提示し、子どもの読解の過程(順位)を分析した。